



特定非営利活動法人

子どもセンターるーも



News Letter

NO. 14
発行日／2024年4月吉日

ネットにあふれる子どもたちの声 —子どもシェルターるーも開設10周年—

1 はじめに

2013年（平成25年）10月に開設した子どもシェルターるーもですが、開設10周年を迎えるに当たり、和歌山弁護士会との共催でシンポジウム「ネットにあふれる子どもたちの声—子どもシェルターるーも開設10周年—」を開催いたしました。

近年、インターネットの普及により、子どもたちが容易に情報にアクセスできるようになりました。良い面がある一方、子どもたちがインターネットを利用する中で犯罪やトラブルに巻き込まれたりすることも増えました。また、インターネットを通じて、子どもたちがSOSを発していることもあります。このような状況下で、私たち大人が適切に子どもたちを支援していくためには、これらの現状や課題を学ぶ必要性が高いと考えました。

そこで、このシンポジウムでは、様々な立場から子どもに関わる活動をしておられる方々をお招きし、特にSNSやゲーム等のインターネットに関する問題を中心にお話いただくことにしました。

2 子どもシェルターるーも10年間の歩み

理事・事務局の伊藤から、るーもの10年間の歩みについて報告しました。

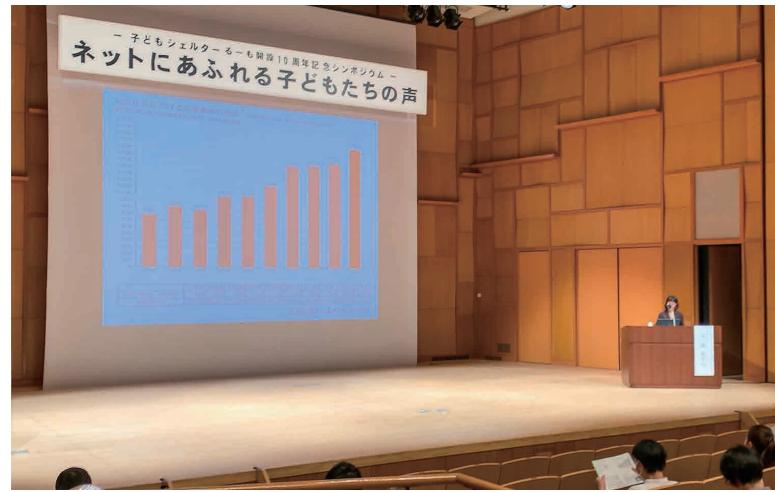
NPO 法人子どもセンターるーもは、2013年（平成25年）2月28日に設立されました。同年10月1日、子どもシェルターを開設し、これまでに延べ120名を超える子どもを受け入れ、次の居場所へ送り出してきました。

るーもを利用した子どもからのアンケートでは、「他の子との関係でストレスがたまつた」、「人間関係は難しい」等、対人関係におけるしんどさを訴える声が複数見られました。一方、るーもで学んだこととして、「自分はひとりじゃない」、「自分自身の大切さ」、「言いたいことをちゃんと言葉にして言ってもいいんだ」等といった声が見られ、るーもを作つて本当によかったと感じるとともに、これからも子どもの最善の利益を実現するため、るーもの活動を続けていこうとあらためて考える機会となりました。

3 和歌山弁護士会子ども電話相談に関する報告

和歌山弁護士会子どもの権利委員会委員の中山良平弁護士から、和歌山弁護士会で実施しているこども電話相談に関する報告がなされました。





この電話相談は、平成29年に開始されました。令和4年度までに延べ244件の相談があり、相談は年々増加しています。子ども本人からの相談は約3分の1となり、その他は子どもの家族からの相談が多くを占めています。

相談内容は多岐にわたりますが、いじめが18%と最も多く、続いて友人関係の相

談が12%、教師とのトラブルが10%、少年事件が8%、親子関係が7%、虐待、非行・問題行動、不登校と続いている。その他には、性・妊娠、養育、体罰、学校事故、兄弟姉妹関係、労働問題といった相談がありました。

4 和歌山県の子どものインターネット利用状況

はじめに、和歌山県環境生活部県民局青少年・男女共同参画課健全育成支援班の中村光利さんから、全国及び和歌山県の青少年のインターネット利用状況と和歌山県の取組みについてお話をいただきました。和歌山県では、青少年のネットリテラシー向上の施策として、「情報モラル講座」や「出張!県政おはなし講座」といった出前講座や「わかやまネットファーラム」を開催し、有害情報対策の推進として、ネットパトロールを実施しているとのことでした。次に、和歌山県から委託を受けて事業を実施している特定非営利活動法人和歌山IT機構の佐々木哲さんから具体的な活動内容をご報告いただきました。また、実際の画像等を用いながら、活動から見えてくる子どもの置かれている現状についてお話をいただき、インターネット世界での子どものリアルについて学ぶことができました。

5 ネット依存相談から見た子どものメンタルヘルス

精神保健指定医、日本精神神経学会精神科専門医・指導医であり、鳥取県精神保健福祉センター所長である原田豊さんからネット依存相談から見た子どものメンタルヘルスと題し、依存症の構造やその背景、本人や家族の置かれている状況等について詳しく解説いただきました。

また、ゲーム依存の相談ケースをもとに、必要な支援や関係機関、当事者への関わり方等について詳しくお話しいただきました。じっくりと時間をかけて支援をしていくことが必要であり、ゲーム依存や障害に正しい理解をもつこと、ゲームを過剰にしているという行動だけにとらわれないこと、本人や家族を孤立させないことが大切であるということでした。

6 子どものSOS救済機関の実践

滋賀県にある特定非営利活動法人こどもソーシャルワークセンター理事長の幸重忠孝さんから、子どものSOS救済機関の実践と題してお話をいただきました。こどもソーシャルワークセンターは、家庭や学校などでしんどさを抱える子どもを地域の居場所でささえる活動をしています。

その活動のひとつとして、深夜のネットアウトリーチ・オンラインサロン活動があります。深夜22時から翌朝5時まで、ピア相談員（同じように生きづらさを抱える若者たち）とソーシャルワーカーがペアとなって、家庭や学校などにしんどさを感じてインターネットの中でつぶやく子どもたちに声をかけ、SNS上でたわいもないおしゃべりを楽しむなどして、子どもとつながる活動です。

幸重さんは、この活動を通して、インターネットは子どもとアクセスするうえではアドバンテージがあるものの、最終的に子どもを救うためには、直接会って支援することや安心安全な居場所を提供することが同時に必要であると感じたとお話されました。また、ネットアウトリーチ活動を通じて、子どもに関わろうとする大人の多さにも驚き、子どもと同じく孤立や寂しさを抱えるおとなたちの姿も見えたとのことでした。

7 おわりに

このシンポジウムでは、様々な角度や方向から子どもとインターネットに関してお話をいただくことで、現代の子どもたちへの支援方法や関わり方について学び、考える大変貴重な機会となりました。今回学んだことを生かし、相談窓口のあり方や支援方法について、子どもたちにとってより良い形で実践していきたいと感じました。

理事：伊藤

シンポジウム チラシ

コタン活動を通じて

子どもシェルターの一人に来た子どもには、一人ひとりに子ども担当弁護士（略して「コタン」）が付きます。コタンは、子どもに寄り添って、今後の生活のことを一緒に考えます。そのために、コタンは子どもの言葉に耳を傾けます。しかし、中高生ともなれば色々とこだわりもあり、その気持ちを理解するのも簡単ではありません。

私は、この一年間、3名の子どもたちにコタンとして関わってきました。毎回、試行錯誤しながらの活動です。子どもと一緒に全力でトランポリンを楽しんだ結果、数日にわたって背中に激痛を抱えたこともあります。週2回はシェルターに顔を出すことを心がけていたところ、担当ではない子どもから「私のコタンはあまり会いに来ない」と言われ返答に困ったこともあります。また、いつも帰り際に「次は〇日の『おやつの時間』を狙って来るわー」と宣言していたので、子どもたちにはすっかり『おやつのひと』と認識されてしまいました。



（★実際の事例をもとに修正・変更をしています）

Aさんは、家族と一緒に暮らしていたのですが、親との関係がうまくいっていませんでした。Aさんの親は、酔うと仕事の愚痴が始まります。Aさんは、それがたまらなく嫌でした。ある日、一人になりたいと思い、Aさんは夜中にこっそり家を抜け出しました。駅のベンチで朝まで過ごして自宅に帰る小さな家出でした。家に戻ると、親から叱責されるだけでなく頬を強く叩かれたのです。

「もう家にはいられない。」

そう感じたAさんは、荷物をまとめて家を後にしました。そして、インターネットで知った「るーも」に電話してくれたのです。

おっとりしているけど芯が強いというのが、Aさんの最初の印象です。面談のときは、いつも自分の考えをまとめたメモを持ってきました。初めて会ったとき、Aさんは、働きながら資格試験に挑戦したいと考えていること、できれば一人暮らしを始めたいことなど、ゆっくりと自分の考えを話してくれました。私は「焦って決断することはないんやない？」と思っていましたが、面談を重ねても「働いて一人暮らしを始める」という彼女の気持ちがブレることはませんでした。そこで、若者サポートステーションへ行って「働く」ということを学ぶ手伝いや、学校での面談に同席してAさんの思いを伝える手伝いをしました。私の事務所の若い事務員さんに「一人暮らしを始めたときの体験談」を話してもらったこともあります。そんな中、Aさんは親と面談をしました。緊張した様子で、自分の気持ちを話していきます。途中からは涙も浮かべ



ていました。面談も終わりに差し掛かった頃、親が「帰ってこないんか？」とAさんに声をかけました。

「うん。家に帰ろうと思う。」

えっ…マジで？ずっと聞いてきた話と違うんやけどっ！私は「マラソンの時間に一緒に走ろうと約束した友だちに置いて行かれるヤツやん」などと思いながら、ポーカーフェイスでAさんたちの話を聞いていました（さすがは弁護士です）。翌日、あらためてAさんの気持ちを確認すると、「親と話してたら家に帰りたくなりました」とはにかみながら話してくれます。ほんま…ええ笑顔やな、このやろう。

早速、Aさんの帰宅に向けて活動を始めました。周囲の協力もあって、翌週には自宅へ帰る準備が整います。Aさんの帰宅前日、るーもで最後の面談をしました。Aさんは、進学についての展望を楽しそうに話してくれます。帰つてからことを話すときは少しだけ不安そうでした。私は「帰つてからも困ったことがあつたら連絡してほしい」と告げて事務所の連絡先をAさんに渡し、るーもを後にしました。

翌朝、私が事務所に出勤すると、Aさんから着信がありました。私は「家に無事に着いたって報告かな。律儀だなあ。」と思いながら電話に出ます。

「先生、おはようございます。」

昨日、家に帰つたんですけど…しんどくなつて出てきちゃいました。」

なるほどね。Aさんのおかげですっかり動じない人間になれました。四十にして惑わずとはよく言ったものです。今なら「ポイント10倍デー」にポイントカードを忘れて落ち着き扱える自信があります。アロンでも毛糸洗いには自信が持てませんが…。

Aさんから話を聞くと、夜中に親といざこざがあって、そのまま家を飛び出したそうです。そして、朝まで外で過ごし、私の事務所が開く朝9時を待つて電話してきたとのことでした。女性の事務員と一緒に駅まで迎えに行くと、両手に大きなカバンを抱えたAさんがいました。3人でハンバーガーを食べたあと、私はAさんが今晚落ち着ける場所を探し始めました。残念ながらるーもには新しい子どもが来つて戻れませんでしたが、他の施設を利用することができます。翌朝、またAさんから電話がかかってきます。

「先生、おはようございます。」

昨日の夜、ゆっくり考えたんですけど…やっぱり家に帰ろうと思います。」

ほお、今度はそう来ましたか。なぜか受話器が普段より重く感じます。話を聞くと、本当は家に帰りたいのではなく、るーもとは違う施設の雰囲気になじめなかつたようです。私は、「今、帰つても同じことの繰り返しやない？」とAさんを宥めながら次の居場所を探し始めました。幸いにも、すぐに別の施設を見つけることができました。Aさんは、アルバイトをしながら、希望していた大学へ進学できるよう準備を進めているようです。

少し長くなつてしましましたが…コタンになったときは、いつも何とも言えないもどかしさを感じながら活動しています。

おかげ様で、「どちらからも切れます」と書いてあるお菓子の袋がどちらからも開かないときは、焦ることなくハサミに手を伸ばせるようになりました。最近は、「どちらからも切れます」を信じて無理やり開けて中身をまき散らかすことも週に一回程度です。

そんな普段の弁護士業務とは異なるコタンの活動を通じて気づいたことは、多職種連携の重要性です。子どもシェルターは、環境に疲れた子どもたちを受け止める場所です。その背景には、法律だけでは対応できない様々な問題があり、異なる視点からの意見や各分野の専門家の協力が問題解決には欠かせません。今後、この記事を読んでくださっている皆さんの力が必要になることもきっとあると思います。その時には、お力添えください。

それでは、皆さん!「アレンバ（アレ+連霸）」と「子どもたちの笑顔」を目指して頑張りましょー!

トラン

るーもの生活風景



令和5年度ボランティア養成講座開催

下記内容で、子どもシェルターボランティア養成講座を開催しました。

1日目

①『子どもシェルターの役割と必要性』

講師：伊藤 あすみ氏（るーも理事・弁護士）

②『青少年のメンタルヘルスについて』

講師：松岡 信一郎氏（和歌山市保健所保健対策課副課長・精神保健福祉士）

③『学校における子ども支援』

講師：星野 佳世子氏（和歌山県教育委員会スクールソーシャルワーカー・和歌山県社会福祉士会スクールソーシャルワーク委員会委員長）

④『対談：社会的養護で育つ子ども達』

対談者：衣斐 哲臣氏（児童心理治療施設「みらい」施設長）
坂口 真紀氏（大阪府富田林市市議会議員）

2日目

①『児童福祉の現状と課題』

～児童相談所における相談援助活動を通して～

講師：鈴木 玲氏（和歌山県子ども・女性・障害者相談センター所長）

②『ボランティアに大切なこと』

～子どもに関わる大人のエンパワメント～

講師：家本 めぐみ氏（タドルわかやま代表）

③『家庭的養護での子ども達の育ち』

講師：八代 一司氏（和歌山県子ども・女性・障害者相談センター家庭支援課長）

里親さん・里子さん

④『子どもシェルタースタッフ・ボランティアの活動』

講師：るーもスタッフ・ボランティア

令和5年12月10日(土)17日(土)の2日間わたり、上記の8つのボランティア講座を和歌山ビッグ愛において実施いたしました。

年末の多忙な時期にもかかわらず、両日とも25名近くの方々の参加を頂きました。

今後、ボランティアとして関わっていくために知っておいて頂きたい知識を中心として、るーもの役割やシェルターでの生活の様子について、また各機関でリーダー的存在として活躍されている講師の方々からの貴重なお話を伺いました。

子どもや若者達の抱えている背景や課題を認識することができ、子ども達が置かれている現状を理解することができました。

講義の中でのグループワークでは参加者の方々の笑顔もみられ、良い雰囲気の中で熱心に課題に取り組まれていました。

また、児童養護施設で育った子ども（現在は成人しています。）と里親家庭で育ち今も里親宅で生活している子ども（現在は成人しています。）お2人から、また里親として沢山の子どもを養育してきた里親さんが関係機関の職員との対談とインタビュー形式で実践的なお話を聞くことができました。

子ども達は大きな環境の変化を経験する中で、たくさんの不安や葛藤を抱えています。

そんな悩みを抱えている子どもたちにとって、自分のことを大切に思い、寄り添って関わってくれ、安心を感じられる大人の存在が子ども達の自立的な成長に繋がっていくのだと再認識しました。

里親さんからは、里親宅から自立した子どもについても、困ったことがあった時、疲れた時に帰ってこられる実家のよ

うな存在になれたらと言われたことが印象に残っています。

最後にスタッフ、ボランティアの方から子どもに寄り添い楽しみながら、子どもと一緒に活動している様子を話していました。一層シェルターの運営にボランティアの方の大切さを感じることができました。

参加者の方々は、メモを取りながら熱心に講義をきいて頂き、皆様の熱意を感じることができました。

最後になりますが参加者の方の声を紹介いたします。

- 子ども達にとって、和歌山にシェルターがあるということが重要だと思いました。他のボランティアさんの話も聞きたかった。
- 里親制度で立派に育った青年のお話には本当に感銘を受けました。深い愛情に支えながら育つからこそ健全な成長につながっていくということを再認識しました。
- シェルターで直接支援されている皆さんからシェルターでの生活の様子をきいて、子ども達が安全で安心できる環境で過ごせていることが伝わってきました。
- グループワークでの話し合いで他の人の考えも聞けて、色々な考え方があることがわかってとても有意義に感じた。
- 一番印象に残ったのは、一日目の最後の対談と二日目の最後の里親さんと里子さんの生の声でした。子どもたちが成長する過程で出会う大人の影響力を実感しました。私も子どもたちに寄り添うお手伝いができればと思います。
- 色々な現場の第一線で活躍されている方々の話を聞いて、今子どもたちが置かれている社会の現状を知ることができ、何らかの支援を必要としている子どもが存在していることがよくわかりました。



今回の研修に参加いただき本当にありがとうございました。

是非、ボランティア登録もよろしくお願ひします。

運営委員やシェルタースタッフにとっても、講師の方々の貴重なお話を聞くことができ、非常に有意義な研修となりました。今後も一層、居場所を必要としている子どもたちの支援に尽力してまいりたいと思います。

理事：永井

ご支援の方法

正会員・賛助会員になって、子どもたちと一緒に支えて下さい。

ご寄付をお願いします。金額は問いません。

お寄せいただいたご寄付は、子どもたちのために活かされます。

ボランティアとして参加をお願いします。

シェルターにはたくさんの人の力が必要です。

「子どもセンターるーも」の研修、イベント活動、広報活動など、可能な形でご参加ください。

会員・寄付	正会員／入会金 5,000円 年会費 5,000円 賛助会員／個人1口 3,000円（年間） 法人1口 10,000円（年間）
振込先	銀行名／きのくに信用金庫 本店営業部 口座番号／2629421 口座名義人／NPO法人子どもセンターるーも
	銀行名／ゆうちょ銀行 口座番号／14730-16476891 口座名義人／特定非営利活動法人子どもセンターるーも トクビコドモセンタールーム

事務局

特定非営利活動法人「子どもセンターるーも」
〒640-8276 和歌山市作事丁38番地

お問い合わせ先

073-425-6060
受付時間 10時～17時まで



Facebook 「子どもセンターるーも」

子どもセンターるーもの情報、活動などを配信しています！